

とっとり通信

2025年4月29日発行

265号

「とっとり通信」は
略して「とつ」。
いつも読んでくださ
りありがとうございます。

こんにちは！平川です。さわやかな春風が心地よい季節となりましたが、お元氣にお過ごしでしょうか。さて今回は、しよもない話の最終回です。

では今月もはりきっていきましょう！

あん頃のぼくらはアホやった4

小学五年生の時、私は佐世保から福岡へ転校する。すぐに出来た友達、魚釣りが好きだったので、私も夢中になる。休日は必ず行っていた。そのうち新しい竿やリールが欲しくなる。私はアルバイトをしようと、通学路にあった新聞販売店へ飛び込んだ。店まらしさんに「タ刊を配りたいです。雇って下さい」というと「おう、明日から来い」と。今思えば、よくまあ小学生を簡単に雇ったなあと思う。25日働いて、五千円（日あたり200円）をもらっていた。釣り道具を買うには、十分だった。ぼくらはよく自転車で大濠公園までボウを釣りに行った。引っ掛けという釣り方で、三本の針（フック）におもりをつけて投げて闇雲に引っ張る。今思えば魚を傷つけるひどい釣



り方である。そんなある日、釣ったボウを見ると、なんだかいつもと違う。ウロコに白い斑点が沢山あった。でも気にせず持ち帰って食べた。それから数日後、朝刊に大きく「大濠公園のボウ、綿かぶり病にかかる」との記事が。それはクラスでも話題になり、ぼくらは食べないと言いつ張ったが、病気になるかもと、しばらく悩んでいた。結局何ともなかった。それから夜釣りに夢中になる。友達との集合時間から深夜の2時である。こんな時間から小学生が自転車で出かける。トニクが飛んでいる国道を、よくまあ事故が起きなかつたと思う。今ならPTAが大騒ぎだろうが、楽しくて仕方なかった。釣り場に着いたら、必ず電話を入れるのが母との約束だった。当時の事を聞くと、電話があるまで眠れず生きた心地がしなかつたらしい。ぼくらはお金が無かつたので、お昼ご飯はいつも



ツッパーにつめた白飯とレトルトカレーを持って行った。海岸で集めた木々に火を付けて、鍋で海水を沸かしてカレーを温め食べていた。ある日のこと、友達K君が何を思ったのか「これ食えるかな？」といきなりまき餌のアミをご飯にのせた。アミとは冷凍された小さなエビのこと。それをガツガツ食べた。K君は「うあ、まずい」と言ったが、私にはそれがイカの塩辛のように見えたので食べてみた。やっぱりまずかつた。調子にのってエサのオキアミをカレーに入れて「エビカレーの完成」とはしゃいで食べたが、やっぱりまずかつた。



ある日、K君と三人で糸島の砂浜へキスの投げ釣りに行った時の話。なかなか釣れず、釣れたとしても小さなキスばかり。ところが10メートルほど隣りで釣っているおじさんは、大きなキスをバンバン釣っている。「なんで隣りのおじさんばかり大きなキスが釣れるのかいな？」と、そりゃ、おじさんは大人やけん、遠くまで投げられるけど、ぼくらはその半分も投げきれんけんね。大きなキスは遠くにおると「よ」なるほど。するとK君が「よし、ちよと行ってくるけん」といきなりズボンで脱ぎ、パンツ一つになり、

エサがついた仕掛けを持ち、海の中へ入って行った。なんと沖まで泳いで行き、エサを置いてくるというのだ。すごい発想である。「かつちえー、頑張てね」とぼくらは見送った。ところがK君、20メートルほど泳いだところで、Uターンして帰って来た。「イテテテ、針が」と見ると足の親指に釣り針がグサリと刺さっている。平泳ぎでけた瞬間に刺さったのだらう。「あらら、これはひどいね。よし、ぼくにまかせて」私は釣り道具箱から、針はすし用のラジオペンチを取り出す。もう一人がK君の足を押える。消毒が必要だということ、消毒になるはずもない海水をチョロチョロとかけながら、ラジオペンチで針をグリグリ引っ張った。「イテテテ」「もううちまうとで取れるけん、我慢」ところが針には返しがあるのだ、そう簡単には取れない。散々こねくり回したあげく「やば取れん。病院いこか」ホッとしたK君の顔を今でも覚えてる。終わり。また何か思い出したら、パートを書きます。それではまた来月に。

発行／有限会社アサム 平川雅樹
〒819-1127 福岡県糸島市有田中央 2-14-36
☎092-321-4001 ✉ hirakawa@asam.jp
・伊都倫理法人会ブログ : <https://itorinri.com/>